
落ちていたのです

徒然花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落ちていたのです

【Nコード】

N2704BA

【作者名】

徒然花

【あらすじ】

塾からの帰宅途中、音々　ねね　の目の前に、唐突に彼は落ちていた…。

ヴァンパイアの朔　さく　との出会いは怪しすぎて。

そんなわけのわからない出会いをした音々と朔のラブコメです

遭遇

とっても唐突に。

ものすごく不自然に自然に、彼は落ちていたのです。

私、三谷音々　みたにねね　、高校1年生、16歳は、帰りを急いでます。

今日は塾があつたんだけど、ちょっと遅くなっちゃって、もう8時。別に危ない夜道でもない。駅から徒歩10分。大半は幹線道路沿いの明るい道で、最後の3分ほど住宅街を行くんだけど、新興住宅街だから街灯もばつちり。家の明かりもまだまだ点いてるしね。だけど、異変はほんとに突然目の前に落ちてた。

自宅の3軒隣。坂田さんちの前に『彼』が落ちてた。っつーか、行き倒れてた？

街灯だけだからなんとなくかわからないけど、黒いマントみたいなのを着た、茶髪の子。

うつ伏せだから顔はわからないけど、多分『彼』だと思う。『彼女』っていう体格でもないし。

とりあえず、見えてないことにしよう。怪しい人にしか見えないし。今時、マントなんて着ないよね…。季節だって夏の終わりだし。絶対めんどくさいことになる。

本能からの警告に素直に従って、私はできる限り離れたところを通り過ぎようとした。

「おい。」

って声をかけられた。いーやー！私に言ってるの？いや、違うよね。私じゃないよね。うん、そうだ。

どう見ても周りに人なんていない状況で、軽く逃避思考。

完全無視を決め込んで、これまた聞こえないふりして歩を進めよう

としたら、

「おいこら。」

と、また声をかけられる。

あーもう、私ですかあ？絶対無視よ、無視！

「さつきから呼んでんだろ。聞こえねーのかよ。」

と、幾分イラついた声が聞こえてきた。

もうっ。知らん顔したかったのに！おかしな人にはかかわっちゃいけないのよ！知らないの！？

さすがにもう聞こえないふりは無理なので、

「…なにかご用でしょうか？」

渋々返事してみた。

「ここに人が倒れてて、お前は無視して通り過ぎんのかよ？助けようとかしねーか？ふっ！」

背中越しに不機嫌そうな声が飛んでくる。まだ彼に背を向けたままの私だったけど、仕方なく彼の方へ向き直った。

彼はすでに起き上がっていて、胡坐をかいて地面に座っていた。

行き倒れてたんじゃなかったのかよっ！とっっこみそうだったけど、もういい。流そう。

「いや、何分おかしな人にしか見えなかったので、関与した暁にはどうなることかと考慮しまして、見えないことにしたのでございます。」

もうちょつと齒に衣着せたほうがいいかなーなんて、これっぽちも思わなかった。

すると彼はむつとしながら、

「こんなカツコイイ不審者がいるかー！」

と、ほざいてくれた。不審者にかっこいいもかっこ悪いも関係ないでしょ。

「そこに。」

じと目で彼を見据えつつ、私は彼を指さしてあげた。

カツコイイって、自分で言ってるよ。この人。

さっきまではうつ伏せてたからよくわからなかったけど、起き上がった顔を見たら、まあ、なるほど、自分でも言い放つくらいカッコイイ男の子だった。

さらさらとした茶髪、きりっとした目、すつと通った鼻筋、薄目の唇。細面の面立ち。どれをとっても、総合してもカッコイイとは言える。でも、この状況は怪しすぎるでしょ。

「怪しいとしか表現できない感じですよ？と言っわけ、さようなら。どこか違うところで倒れなおしてください。」

そう言って、家に逃げ込むことにした。あー、でもこれって家がばれればだよねえ。困ったなあ。あ、ケーサツさん呼ぼうか。そうだ。おもむろにケータイを取り出す。

「なにすんだよ？」

「あ、とりあえず通報なんてしてみよっかなって思いました。あ、いえ、すぐさま退散してくださいさるならしませんけど？」

「通報って……。しかしお前、えらく冷静だよな。」

「いえ？充分パニックってますよ？で、退散しないんですか？」

「わかったよ。とりあえず、今日のところは退散するよ。」

「じゃあ、今日のところはって言わずに、二度と来ないでください。さようなら。」

「……」

彼は半目で私を見つめていたけど、しゅしゅ移動してくれるみたいだったの、とりあえず、笑顔で見えなくなるまでお見送りしてみる。よし、角曲がったな。

でも、油断するまい。

…… 5分。よし、大丈夫だろ。

やっと家に入れた。

あーもう、なんだったんだろ。

すぐさまお風呂に入って、それからやっとお夕飯にありついて、一息。

あれは絶対変質者だね。今時マントなんて誰も着やしない。

「なーに？音々。ぶつぶつ独り言なんて言って。気持ち悪い。」

お母さんに突っ込まれた。

「いや、ほんの独り言。」

「音々、勉強しすぎでおかしくなった？」

中2の弟、奏 そう まで冷たいことを言う。

「奏、冷たいなあ。おねーちゃんはそんなに勉強ばかりしてません。」

「だって、音々、部活もしないで塾行つてさあ、もちろん彼氏もないしで、めっちゃ暗い青春じゃね？」

かわいそうな子を見るような目で姉を見るな。

「…いたいとこ突いてくるねえ。」

たしかに、私の高校は県下でも有数の進学校。そんなところにまぐれで受かったフツの私は、めっちゃ努力しないとフツでもいられない。だからって勉強漬けもなあって、塾は行ってるものの、友達ともちゃーーんと遊んでる。彼氏はいないけど、今は別にいらないからいいの！

2こ下の弟、奏は、勉強もできて、スポーツもできて、そりゃモテル。バラ色の青春 絶賛謳歌中だろーさ。まあ、自慢の弟だけどねたぶん、私みたいに努力しなくても同じ高校に来れるだろうな。

「奏はいいよね。勉強もできるし、モテルし？私とは違うもんねー。」

「明るい生活を分けてあげたいよ。」

「いらない。ごちそーさま。」

おかーさま。今日もおいしいご飯をありがとう。

「はーい。もう寝るの？音々？」

自分の食器を片づけている私に、お母さんが聞いてくる。

「ん、学校の宿題だけやってから寝るわ。今日はなんだか疲れちゃった。」

そう。あの変質者のせいで…！精神的ダメージだよまったく。

「わかったわ。じゃ、自分で飲み物持つてあがりなさいねー。」
と、温かいミルクティーとクッキーの載ったお盆を手渡される。
「ありがとう。おやすみ。」

さっさと宿題終わらせて、早く寝たいわ。

遭遇（後書き）

勢いで書き始めてしまいました。
読んでいただけて幸いです。
ありがとうございました。

再会（前書き）

再会の王道です。

再会

あれから1週間。

特におかしなこともなく、いつも通りに時間は過ぎて行った。

…のだが。

まだまだ秋と言うにはあつつい日が続いている9月末。

何とも中途半端な時期に転校生が来た。

「あゝ、今日からこのクラスに編入になった永山朔　ながやまさく
くん。みんな、よろしくな。」

先生と共に教室に入ってきたのは、あの変質者！あの時みたいに黒いマントはつけてないけど、確かにアイツだ！

今日は、こないだのように不機嫌な顔ではなく、むしろ柔らかい表情でみんなに挨拶している。女子の皆さんはなんだかざわついてるぞ？ま、見た目はいいもんね。いわゆる王子様みたいな？

「じゃあ、あー、沢口の横、そうそう、三谷の後ろな。そこに座つて。わからないことがあつたら周りに聞けばいいから。教科書は沢口見せてやれ。」

「へーい。」

手を挙げて返事をする沢口くんを目指して、彼はやってきた。

私は廊下側の後ろから2番目の席。沢口くんは最後列で私の斜め後ろ。

お約束の『隣』ってのは免れたけど、真後ろって…。

「よろしくね。」

私、沢口くん、そして私の隣の堂川菜実　どうかわまみ　ちゃんにつこりとあいさつする変質者、もとい永山くん。王子スマイルになんてだまされないからね、わたしはっ！

「どしたの、音々？こっわい顔してるよー。せっかくカッコイイ男

の子が近くにきたっていうのに。うふふ。」

のほほんとした声で、茉実に指摘される。そりゃ険しくもなるわよ。こないだの今日だし。

でも、編入したてで変な噂流すのもどうだかと思うので、とりあえず自分の心ひとつに収めておくことにした。

「そーゆーことよりも、次算数でしょー！嫌いなんだもん。」
と、誤魔化してみる。

「あはは。また算数とか言ってるし。今日は当たらないでしょ？」
「ん、多分ね。」

茉実は、ふんわりとしたイメージの、女の子。肩の上でふんわり揺れるちよつと茶色がかったくせ毛と、くりくりパツチりお目がキユート。男女ともに人気高し。私とは、いつも仲良くしてもらってる。私はどちらかと言うとサバサバさくさくって感じかなあ？

茉実のかわいらしさで鋭気を補充して、気を取り直す。

と、そこへ永山くんが、

「三谷さんて、数学苦手なの？オレ、得意だからいつでも助けられるよ。」

って、爽やか笑顔で割り込んでくるな！

「あゝ、その時はお願いいたします。」

多分しないけどなー。とりあえず空気を読んでさりと返事しておく。

「ほんと、三谷って数学の時間死んだ魚の目してるもんなー。」

と、沢口くんまで。もういいから。

「はいはい。もう朝のホームルーム終わるよ。算数の用意しなくちゃ。」

なるべく背後を見ないように、私は言った。

それから一日。

ほとんど永山くんと沢口くんと茉実とで行動することになってしまった。

沢口くんは学級委員だからっていうことで、慣れるまでのお世話係ということなんだけど、やるー二人でずっと行動するのはさすがにどうかと双方が言つて、仕方なく近所さんの茉実と私まで巻き込まれてしまったのだ。

できるだけ関わりたくないのに！って、そんな心の叫びなんて誰にも届かず、かといって不機嫌でいるのははばかられ、適当に合わせで適当に流すことにした。

でも、永山くんは結構目立ってた。

そりゃ自分で言い切るほどのカツコよさだもんね。行くとこ行くとこで女子の視線が痛かったわ。

そしてやっとなつて放課後。

やっとなつて変質者、もとい永山くん（しつこい）から解放されるー！と思つたのに

「みんな帰りはどっち方面？へえ、奇遇！三谷さん同じ駅だね！」

ニコッと笑顔付きで言われた。

ウソつけ。何が奇遇だ。今初めて知りましたーみたいなこと言つてこないだ落ちてたでしようが。うちの近所で！

「えーそうなんだー！じゃあ一緒に帰ろうよ。私は駅までだけど。

音々、今日は塾なかつたでしょ？」

って、茉実まで！なんで誘うかなあ…。塾があるからダメって言おうとしたのに、休みなのも暴露されてるし。

万事休す。

「で、なぜうちのガツコに編入してきてるんでしょうか。」

「それはまあ、おいおいと。」

「で、なぜ私のガツコがわかつたのでしょうか？」

「そりゃもちろん、お前を張つてたからに決まってるんだろが。」

「…やっぱ、変質者…」

「それは違う。」

「じゃ、ストーカー。」

茉実と駅で別れた後。がたごとと電車に揺られながら。

まだ帰宅ラッシュには程遠い時間なので、ゆっくりと座れるのだけど、なぜか永山くと隣り合って座っている今の状況。2 駅の我慢。永山くんの顔を見ることがなく話す私と、長い足を組んでリラックスした感じの永山くん。

「てゆうか、なんで私を張る必要があったのでしょうか。」

「それも、おいおい。」

「いえ、そんなおいおいっていうほど関わる予定はございませんので、早目にお願いたします。今すぐくらいの勢いで。」

「わかったけど、そのしゃべり方やめてくんない？よそよそしい。」

「いえ、それくらいの方がいいかと思えます。」

「いちお、クラスメイトになったんだからさあ、フツーに話せよ。」

そしたらいきさつも話してやるよ。」

「ええええええ！脅しですか。」

「脅してねーだろ！」

こっちは必要以上に距離を縮めたくないのですがー。

「…わかったわよ。で、とりあえずもう駅に着いたんだけど、永山くんの家ってホントのところ、どこなのよ？」

「おまえんち。」

「はあああ？」

もう、頭痛くなってきた。

説明

よろよろしながらとりあえず自分の駅で降りる。

あぶねーぞ、とか言いながら腕を取られるんだけど、ふらふらしてんのはあんたのせいですしっ！

とりあえず、家の近く、幹線道路横の公園で話すことにした。

うちに上げるなんてもってのほかじゃない？家族だっているんだから。

公園のベンチで、並んで腰掛ける。

パツと見はカレカノつばいけど、二人の間にある空気は冷たいもんです。はい。

そして、彼が話す内容は、はつきり言って理解不能と言うしかなかった。

「そもそもあの日、オレはお前の香気に中てられて落ちたんだ。」

ベンチに座ってから、最初の一言はこれ。いきなりわからない単語が入ってる。

それ、造語？

「何よ、それ。香気って。」

「いわゆるフェロモン？みたいな？」

フェロモンてなんだったつけー？香水？ん？違うか。

「そんなの私つけてないし。」

「つけるとかそーゆーんじゃないくて、お前の血がそーいうものを放ってたんだよ。魔物には敏感にわかる。」

『香気』の次は『マモノ』ですか。またよくわからない単語が出てきたよ。

「えーと、今のマモノってなんですか？」

「魔法の『魔』に『物』で魔物。有名どころで言うとなんパイアとか狼男とか？ちなみにオレはヴァンパイアだけど。」

「…ヴェル○アイア？」

「それ、車。」

「…ヴァン○ード？」

「それも車。」

「…ヴェル○ンテ？」

「ケチャップ。こら。現実逃避すんなよ。」

だってヴァンパイアなんて、小説とかホラー映画の中だけでの話じゃない。現実主義者の私には理解できないわ。

「だって、そんなのファンタジーの世界じゃない。理解できないよ。無理。」

「ま、現実だからな。理解するとかしないとかってことじゃねーし。で、だ。お前の香気はかなり強いからいろんな魔物が引き寄せられるんだ。例えば…お前、よく小動物を見かけるだろ。」

「うん。」

「遠巻きに見てるやつらは大体下等の魔物だ。やつらはお前の香気に引き寄せられるものの、強すぎて近寄れない。お前は、気付かないうちに香気で結界を張ってるみたいになってる。オレが落ちたあの日は新月で、魔力が落ちていた。早いところどこかで新月の夜をやり過ぎそうと飛んでいたところにお前の香気の結界に中って落ちたってわけだ。」

中ったとか、なんか食中毒みたいなこと言っつて。私、そんなもん出してる覚えがないから、インネンつけられてるとしか思えないわ。

「へえ」。私の知らないところでいろいろあるんですね。」

「お前、めっちゃ他人事だな。」

「ま、理解の範疇超えちゃったからかな？」

「でも、体調崩すとその香気の結界が弱まるから、魔物はいつもよりも近寄ってくるんだぞ。」

「えええっ！！それは困る！！…って、魔物に狙われたらどうなんの？」

そんなこと経験ないわけだから、怖さも何もわかりやしないよ。

「そりゃ、血を吸われたりだなー。へたすりゃ食われるぞ。」

永山くんがにやりとしながら、怖いことを言ってくれる。

「いーやー！！まだ生きたい！！…って、あなたも、まさか食べようなんて思っていないでしょうね？」

思わずベンチの端までズザザザって勢いで間をとってしまった。

「オレはヴァンパイアだから、血があればいい。」

サラリと言つてのける彼。

「いや、血も嫌なんですけど。」

血を吸われるなんて、痛そうじゃない！映画とかでよく見る、首に犬歯をおっ立てて、そこからちゅーちゅー血を飲むんでしょ？想像しただけでも痛そう。ましてや食われるなんて…想像すらできない！！ごめんだわ。

でも、ごくごくフツーの人間な私が、そんな得体の知れないものを防ぎようなんてないじゃない。…キリスト教にでも改宗するか？十字架を常に携帯しとく？にんにく？あ、でもそれじゃあ狼さんが来たら対処できないよね。エクソシストってホントにいるのかなあ？神社でお祓いなんて、まず効かなさそうよね。ヴァンパイアとかって外来種だもんね。

あゝもう片目の下駄履いた妖怪少年、助けに来てくれ！

そんなことを悶々と考えていたら、彼は私の考えを見透かしたのか、「オレが守ってやるよ。お前のこと、かなり気に入ったからな。」と、おもむろに発言した。

つか、あんたもヴァンパイアじゃないの。危険なことにはかわりないじゃないの！

「結構です。守ってやるのか言つて血をもらおうって魂胆でしょ。やだ。」

「即答かよ。でも、血じゃねーといけねえこともないんだぜ？」

「血以外って何よ？」

「体液。」

「…えろ。」

じと目で永山くんを見据える。

「そのリアクション、どおよ？キスでも十分栄養は補給できる。」

なんか、堂々と言い切っちゃってますよ、コノヒト。

「やっぱ、遠慮します。キスは大好きな彼氏さんとしかしたくないもんで。」

それでも一応は乙女だからね。大事に置いてあるんだから。栄養補給にキスとか言われても、ときめきもくそもあつたもんじゃない。でも、

「彼氏なんていないじゃん。オレが彼氏になればいいことじゃねーの。」

ニヤニヤしながら言う永山くん。

さすが、1週間も張られてただけある。痛いところかれたわ。こないだもこんな会話を奏としたなあなんて思い出してしまったよ。

でもさ、そもそも好きな人と付き合いたいじゃない。第一印象最悪、その上人外って、まだそこまで恋愛に飢えてないわよ。

「告ってくれるのはうれしいですが、やっぱり遠慮しますって。」

これを告白と取るのかどうかはびみよーだけど。どう表現したらいいのかわからん。

「知らねーぞ。今まではたまたま高等な魔物に出会わなかったから無事に暮らしてきたけれど、これから危険な目に遭う可能性はあるんだからな。」

「高等な魔物って何よ？」

「オレみたいなやつ。変化もできるし、香気の結界も耐えられる。」
変化？永山氏、何かに変身してるのか？

「そのランク付けがイマイチわかんないんだけど…。」

「一言でいうと魔力の程度で高等下等は決まる。」

「ふうん。」

「下等な魔物は人型に変化できない。小さければ小さいほど魔力は弱いな。」

「ふうん。」

生返事を繰り返す私。ふうんと言えないじゃん！

彼氏??

「疲れた…。帰るわ。なんか情報処理能力を超えてる、もうフリーズ。」

ヴァンパイアだの魔物だの、理解不能な話のせいで疲労感100%。どんよりオーラを発する私にお構いなしな彼。

「わかった。」

と言つて、二人して立ち上がり、公園を出た。

「で、ほんとにほんとに家どこよ。」

並んで立つと背の高さがよくわかる。私は彼の肩くらいまでしか身長がなかったから、見上げないと顔は見れない。

こないだは倒れてた上に座り込んでたからわからなかったけど。少し見上げながら私は聞いた。

「お前んちだつて言つたろ。ま、正確に言つとお前の部屋の前の軒下。」

飄々と答える彼。

「…こないだから蝙蝠がいたような気がしてたけど、まさか…」
ヴァンパイア〓蝙蝠つて、あまりにベタ…

「あ、気づいてた?」

つて、王道ですよん!コテコテ過ぎてがつくり。

この1週間ほど、うちの軒下に蝙蝠がいたのよ。朝夕のカーテンの開け閉めの時に気になってた。

そうか。蝙蝠の姿で見張つてたのか。

なんかまためまいがした。

「おっと、またふらついてんぞ。大丈夫か?」

とか言いながら、また腕を取つて支えてくれた。つか、めまいがすんのはあんたのせいでしょ!つて言葉を発しかけた時、

「音々っ!!彼氏?!うそ、まじ?!」

と言う、奏の声が聞こえた。

気が付くとすでに私の家の前。

ちようどふらついて彼に支えられたところを、家から出てきた奏に目撃されたのだった。

なんつータイミングで外に出てくるんだ。弟よ。

奏は永山くんをびっくりしたように凝視して、それからおもむろに「にこー」っという効果音の出そうなとびきり笑顔になって、

「オレ、音々の弟の奏ですっ！いやー、音々に彼氏ができるなんて嘘みたいです！こんなにつぶいねえちゃんでほんとにいいんですか？！」

なんて、すっごい失礼なことを早口でまくしたてた。もう、永山くんの手を握り締めんばかりの勢い。

お手手ブンブン、しっぱブンブン（幻視で見えた）。

しかも、彼氏って！！誤解も甚だしいぞ。落ち着け、奏！！

「いや、奏、ご…」

誤解だからって言おうとした私を永山くんは制して、

「あー、初めまして。弟くんなんだ？よろしくね。オレ、永山朔っていいです。」

なんて、爽やかに笑いながら挨拶しちゃうし！違うから！！

「かーさん！！音々が彼氏連れてきた！」

って、大声で家の奥にいるだろう母親に言いながら、家の中へ入って行ってしまった。

「やつ、もう、違うから！…って、奏！聞けー！！」

私の叫びは虚しく宙をこだまただけだった。

奏に向かって差し伸べられていた手を永山くんは握り、

「家族にばれちゃったねー。もうオレ、音々の彼氏だー。」

なんて白々しくのたまう。そのにやけた顔にグーでパンチしたくな

った。

「なんで誤解させるのよ！あーもう、最悪ー！」

「いいじゃん。外堀外堀。埋めてけ埋めてけ」

「埋めるな！」

不機嫌全開な私と、上機嫌な彼。すごい温度差。

と、そこにお母さんがいそいそと出てきた。こっちもかなりの満面の笑み。怖っ。

「あらあらあら、こんな玄関先で音々たららご案内もしなくてごめんなさいねえ。ささ、上がって頂戴。時間は大丈夫？」

手を引いて家の中に案内しそうな勢いのお母さん。

「あ、いえ、もう夕飯時ですし…」

なんて一応遠慮する永山くんを家に押し込んだお母さんは、強引に夕飯まで食べさせてしまった。

永山くんも、遠慮しているように見せかけて絶賛外堀埋立中。

お母さんはそもそもイケメン好きだし、奏は「姉よりも兄が欲しかった」って公言するくらいだから、もう、犬が尻尾振ってるみたいになってる。いつものすかした態度はどこへやった？！

もう、ほんとに彼氏と思っちゃってるよ、うちの家族…

娘の命のピンチだよ？声には出せないけど！

私はみんなに顔を背けて不貞腐れてしまった。

夕飯を食べーの、食後のお茶しーの、がつつり居座りそんな永山くんをなんとか追い出すことに成功した私は、宿題をしようと部屋に戻った。

…そういえば、軒下に住み着いてんだっただけ。

カーテンを閉めようとしたその手が一瞬止まった。軒下にばっちり朔蝙蝠を発見して。

目があったけど、知らん顔してカーテンを閉めたら、

「音々、冷たい。」

って、外から声が聞こえた。

彼氏?? (後書き)

こてこて王道ですね。王道好きなもんで…

読んでくださってありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2704ba/>

落ちていたのです

2012年1月11日10時49分発行